

機関番号: 64401

研究種目: 基盤研究(C)

研究期間: 2008~2010

課題番号: 20520722

研究課題名(和文) グローバル化と南インド音楽の変容に関する人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study of Globalization and South Indian Music

研究代表者

寺田 吉孝(TERADA YOSHITAKA)

国立民族学博物館・民族文化研究部・教授

研究者番号: 00290924

研究成果の概要(和文):

南インドの古典音楽は、インド国内だけでなく、欧米のインド系およびスリランカ系移民コミュニティでも活発に演奏・教授されている。音楽は文化的アイデンティティの指標として、また次世代への文化の継承の手段として重要視されており、かれらの音楽に対する強い関心と豊かな経済力は、インドの演奏家の海外公演、移住を促している。また、インターネットを利用した教授法の開発は、インドと移民コミュニティ間の実質的、心理的距離を大幅に縮めており、移民コミュニティ内の音楽的嗜好が、インドで演奏される音楽の内容にも影響を与え始めている。

研究成果の概要(英文):

South Indian classical music is actively practiced in diasporic Indian and Sri Lankan communities in England and North America, as a marker of their ethnic identity and as a means to transmit cultural values to the next generation. Their strong interests in music have generated closer contacts between India and diasporic communities, through concert tours and migrations of Indian musicians, long-distance teaching through internet and performances in India by diasporic musicians and dancers. The music as practiced in India has been in turn affected by the increasing presence of NRIs and overseas Sri Lankan Tamils in terms of repertoire, language and manner of performance.

交付決定額

(金額単位: 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野: 人文学

科研費の分科・細目: 文化人類学・文化人類学、民俗学

キーワード: 芸能・芸術

1. 研究開始当初の背景

|

インドの音楽文化は、1990年代から急激に変化してきている。その変化は、音楽の内容（演奏法、演目、楽器）だけではなく、音楽文化を支えてきた社会関係にも顕著に現れている。その背景には、グローバル化に伴う大規模な人の移動があり、特に近年世界的に注目されているIT産業などに携わる富裕層の移動・移住は、国の内外を問わずインド音楽の実践に大きな影響を与えている。各地に形成された在外インド人（NRI=Non Resident Indians）コミュニティでは、インド起源の音楽が頻繁に享受され教えられている。このような国外での需要の高まりに伴い、音楽家の海外公演が飛躍的に増大し、また自ら移住して活動したり、複数の拠点をもちノマド的音楽活動を展開したりする者も増加している。

## 2. 研究の目的

本研究は、インド国内外の複数地域で調査を行うことにより、これまで地域ごとに考察されてきた南インド音楽の実践を、グローバルな人的・経済的ネットワークの枠組みの中で統合的に分析することを目的とする。永劫不変のイメージをもつインド古典音楽が、実際にはグローバル化を背景にして、鳴り響く音響としての音楽とそれを支える社会関係の両面で、本質的に変容している点を明らかにする。

## 3. 研究の方法

グローバル化を背景にして変化する南インド音楽の調査には、インド国内における動向調査と並行して、インドの音楽の進出が目覚ましいヨーロッパおよび北米における現地調査が不可欠である。本調査では、インドと欧米の結節点となる演奏家、音楽団体と彼らの活動を主対象としてインタビューと参与観察を行った。

### (1) 2008年度

インド（2回）およびシンガポール（1回）において現地調査を行った。インドでは、2009年度以降の本調査に向けて、南インド古典音楽における1990年代以降の展開と新しい受容形態に関する予備調査を行った。シンガポールでは、同国における国家主導の多文化主義がインド系コミュニティに及ぼす影響、南インドとの人的ネットワークなどに関する予備調査を行った。

### (2) 2009年度

イギリス、インドにおいて各1回の現地調査を行った。イギリスでは、ロンドンのインド人コミュニティにおいて、南インド音楽・舞踊の上演や教授の形態を、演目・上演形態・演奏スタイルなどの変化に注目しながら

調査した。インドでは、南インド音楽の中心地とされるチェンナイで調査を行い、現地で毎年12月に開催される古典音楽・舞踊祭に参加し、NRI演奏家の活動を調査した。

### (3) 2010年度

アメリカ合衆国、インドにおいて各1回の現地調査を行った。アメリカ合衆国では、ワシントン州シアトル市内および周辺地域にある音楽団体とその活動について調査をおこなった。特に、シアトルで最も長い歴史をもつ音楽団体ラーガマーラへの聞き取り調査を行い、北アメリカにおけるインド音楽・舞踊の上演・教授の実態、南アジア系コミュニティとの関係などについて理解を深めることができた。インドでは、前年度に引き続きチェンナイにおいて、NRI演奏家の活動の実態を調査した。特に、アメリカ合衆国クリーヴランド市で行われる音楽祭の主催者らにインタビューを行い、音楽祭の歴史、理念、運営法などに関して情報を収集した。

## 4. 研究成果

### (1) グローバル化と音楽の「環流」

音楽におけるグローバル化の一側面として、国際音楽資本によって流通している欧米の音楽が、世界各地の音楽とハイブリッドな音楽を形成し、それらが同じ流通経路でワールド・ミュージックとして広められるといった循環現象があげられる。この現象は、欧米の先進国イメージと、国際音楽企業の巧みな広報戦略によって、各地域の人々が受動的にそれらの音楽を消費していると考えられることもできるし、容易に入手できるようになった世界各地の音楽を流用して、したたかに自らの音楽作りをしていると捉えることもできる。

インドにおいて生産される音楽は、少数の例外を除いて、このような循環に組み込まれておらず、地域内での自給自足状態が長年続いた。もともと、南インドは外部から入ってくる音楽に敏感に反応し、それらの諸要素を選択的に取り入れてきた。また、古典音楽の例のように、西洋や西洋の音楽の存在自体が、現行のジャンルの形成に大きな影響を与えたとも考えられる。しかし、ここ数十年のグローバル化の進行は、南インドの音楽文化に加速度的な変革、しかも質的な変化をもたらす兆候がみられる。

社会人類学者の杉本良男は、南アジアの衣食住や映画・ファッションなどの分析を通じて、インドの文化は単にインド国外に広がっているのではなく、国外のインド文化や国外在住のインド（系）人（NRI=Non Resident Indians）の存在がインド国内の文化に大きな影響を与えている現象を、文化の「環流」という概念でとらえようとする。例えば、イ

ンドを代表する伝統的な衣服と考えられているサリーは、地域によって図柄、色の組み合わせ、着方が異なるが、それらを斬新なやり方で組み合わせ、新しい要素を取り入れて作られた、特定地域に還元できない（脱領域化された）サリーが、NRI 市場を念頭において作られている。このような「NRI サリー」がインド国内市場にも逆流入し人気を博している。制作本数において世界一を誇る映画においても、海外ロケを含め NRI が登場する映画が数多く作られるようになり、そのファッションやことば使いなどがインド国内でも流行る現象が報告されている。

1990 年代はじめの経済自由化以降、インドの都市部における生活スタイルは、衣食住から通信手段・ファッションにいたるまで、ほとんどすべての面で急激に様変わりしており、インドの音楽を取り巻く環境も加速的に変化している。インドの音楽は、杉本のいう文化の「環流」がまさに現在進行している分野の一つであるといえる。以下では、南インドの音楽が最も活発に演奏・教授されているアメリカ合衆国とイギリスにおける実践の実態を素描し、国外における活況がインド国内の実践にいかなる変化をもたらしているかを報告する。

## (2) アメリカ合衆国における南インド古典音楽

アメリカ合衆国では、これまでにないほど活発にインド音楽が演奏され、教授されている。その背景には、インドの経済成長とアメリカの移民法の改正に起因する、インド系コミュニティの拡大と彼らの経済力の増大が存在する。インドでは 1991 年に経済が自由化され、それ以来目覚ましい成長を続けていることは周知の通りである。特にインドの IT 産業の躍進は世界中のマスコミでも盛んに取り上げられており、「インド」と「IT」は常にペアで語られるほどになった。インドの IT 関連技術者に対する国外での需要は大きく、彼らの多くがアメリカ合衆国に移住した。このような人の移動を法制面で容易にしたのが、同国における 1965 年の移民法の改正である。この改正により、それまでの地域による移民数の制限が大きく緩和され、アジアからの移民が急増する契機となった。インドからの移民もこの例外ではなく、インド系アメリカ人の人口は 2000 年には約 170 万人を数えるまでになった。近年のインドからの移民は、IT 関連技術者を中心に高学歴のエリート層、またヒンドゥー教徒の場合は高位カーストの出身者が多いのが特徴である。平均年収もヨーロッパ系アメリカ人のそれを上回り、アメリカ合衆国で最も富裕なコミュニティとなった。

### ①音楽協会

このような豊かな経済力を背景にして、各地に形成されたインド系コミュニティでは、古典音楽が頻繁に上演され教授されている。インド音楽の実践は、移民一世のホームランドに対するノスタルジーを癒すだけでなく、北米生まれの子供たちにインド文化を教える重要な手段ともなっている。1970 年代半ば以降、主要都市の多くで音楽協会が設立され、インド音楽の公演・ワークショップを主催したり、音楽学校を併設したりしている。ニューヨーク（1976 年設立）、ミネアポリス（1980 年）、シアトル（1981 年）、シカゴ（1983 年）、フリーモント（カリフォルニア州、1985 年）、ポートランド（オレゴン州、1987 年）、オースティン（1991 年）など、コンサートの企画を事業の中心とする非営利音楽団体が次々と組織され、南アジア在住の演奏家たちを頻繁に招聘するようになった。また、各地の音楽協会と協力して北米ツアーを企画するアンブレラ団体も組織され、インドからの公演ツアーがより容易に行われるようになった。

### ②ティヤーガラージャ音楽祭

北米における南インド古典音楽の隆盛に大きく寄与しているのが、オハイオ州のクリーヴランド市で毎年開かれるティヤーガラージャ・アーラダナ音楽祭である。ティヤーガラージャは 19 世紀の作曲家で、南インドで最も演奏頻度の高い作曲家である。インドでは、彼の業績を称える慰霊音楽祭が、没後間もなく始まり、彼が一生の大半を過ごしたと言われるティルヴァイヤールで毎年盛大に行われている。また、同様のイベントがチェンナイを始めインド各地で開かれている。北米各地の南インド系コミュニティにおいても、ティルヴァイヤールをモデルとした音楽祭が毎年開かれており、1990 年代中旬には、すでに 100 カ所以上で開催されていたという。この中でも 1978 年に始まったオハイオ州クリーヴランド市の音楽祭は特に有名であり、すでに 30 年以上継続して開催されている。1992 年には、4 月 18 日、19 日を「聖ティヤーガラージャの日」とする宣言がオハイオ州知事によって行われ、この音楽祭は公的にも認知されている。2009 年の音楽祭は 11 日間にわたって開催され、北米在住の演奏家だけでなく、インドからも著名音楽家たちが数多く招聘された。音楽祭の様子はインドでテレビ放映されるようになり、インド在住の演奏家にとっても、この音楽祭へ招聘されることが一つのステータスとなっている。

### ③インターネット教授法

インド音楽の国外における需要の増大は、音楽の学び方にも大きな変化をもたらしている。特にアメリカ合衆国のインド系コミュニティでは、インターネットでスカイプ（無料で相手の顔を見ながら話ができるシステム）を用いて、インド在住の師匠から、モニター

を見ながらリアルタイムで音楽を学ぶ方法が盛んになってきている。この教授法では、音楽の精神性を伝えるのが、師匠への尊敬の念が薄れるなどの批判はあるが、国外に住みながらインドの一流演奏家から定期的にレッスンを受けることができるため人気が高まっている。また、当初は個別に行われたこの教授法を、組織的に取り入れる音楽学校が出現し始めている。

クリーヴランドの音楽祭を主催するV・V・スンダラムは、北米に住む若い演奏家がチェンナイで演奏する機会を増やすためにインターネットを用いた教授法の開発を進めている。当初は1対1の対面教授から始まったが、インターネットとビデオカメラを併用することにより、一人の師匠が異なる地域に住む複数の弟子を教えることが容易になった。実際、このようにして音楽を学んだ北米のインド系子女たちが数年前からチェンナイで演奏会を開いている。

また、2007年のクリーヴランドの音楽祭でも、この教授法を用いた実験的な試みが行われた。チェンナイに住むベテラン演奏家数名が数週間にわたって北米各地に住む28人の若者たちに、公演で演奏する演目をインターネットで指導した。音楽祭の直前に対面リハーサルを行い、同一の舞台でともに演奏を行った。このような教授法に対する懐疑的な意見も存在したが、公演は大成功だったという。この公演の経緯は音楽雑誌などマスメディアでも紹介され、インターネット教授法の有効性を内外に知らしめた。さらに最近では、国内の遠隔地に住む弟子や、同じ町に住む近隣の弟子に対してもインターネットを利用する教授が行われて始めている。

### (3) 英国における南インド音楽

#### ①スリランカ出身のタミル人コミュニティ

イギリスにおいても南インドの古典音楽（および舞踊）は活況を呈しているが、北米とは大きく異なる状況が存在する。その違いの理由となっているのはスリランカから移住したタミル人の存在である。スリランカでは、多数派のシンハラ人（仏教徒）と少数派のタミル人（ヒンドゥー教徒）が対立し、タミル人がスリランカからの独立を求めた武力闘争が1983年から始まった。対立が激化するなかで、数多くのタミル人がスリランカを去り、その多くがイギリス、ヨーロッパ諸国、カナダ、オーストラリアなどに難民として移住した。

イギリスのタミル人コミュニティの大多数がスリランカからの難民である。正確な統計は存在しないものの、イギリス全体で約30万人（内ロンドンに約20万人）のスリランカ出身のタミル人が生活しているといわれている。彼らのほとんどは、政治状況が好転

すればスリランカへ帰還する願望をもちながらも、長年にわたり生活の基盤が移住国に移っているため、その夢が実現する可能性は極めて低いと感じるものが多い。このため、コミュニティ内におけるタミル文化の維持は最重要課題の一つとして広く認識されており、特に幼年時にスリランカを離れたり、英国で生まれた2世代への文化の継承は重要な関心事となっている。

#### ②タミル学校、文化センター

イギリスのタミル人社会において、文化継承の核の一つになっているのがタミル（語）学校（タミル・パーダサーライ）である。移民コミュニティが子供たちに母国の言語を教えるために学校を作ることは広く見られる現象であるが、イギリスにおけるタミル学校の特徴は、言語と音楽・舞踊が1セットになって教えられている点にある。履修が制度化されているわけではないが、文化を継承するためには言語と音楽・舞踊の習得が等しく重要であると考えられており、その実践が常態化している。タミル学校は週末にだけ開校される補習校であり、地域の小・中学校の施設を借りて使うことが多い。公共施設の有効利用が行政により奨励されているため、学校側からも歓迎されており、政府の補助金もある。

タミル学校の他にも、インドの音楽・舞踊を学ぶことができる文化機関が存在する。最も有名であるのが、インドに本部を持つパラティア・ヴィディヤ・バヴァンのロンドン支部（ロンドン・センター）である。バヴァンはガンディーの思想を活動の支柱とする会員制の文化支援団体で、1938年にムンバイで設立された。現在では国内に100以上の支部をもつ。ロンドン・センターは、インド国外における最初の支部として1972年に設立された。

このセンターでは、週末を中心に週6日間、インド音楽・舞踊の授業が行われており、多くの子供たちが学んでいる。ここでは、対象がインド全域であるため、北インド、南インドの両方の古典音楽・舞踊が教えられているが、生徒はスリランカ系、南インド系の方が多い。キリスト教会の建物を改造した建物を本拠地としており、チャペルを300席の演奏ホールに改造し、年に100以上の公演を企画している。インドの著名演奏家も数多くこのホールで演奏しており、インド国外では最大級の文化センターとなっている。

このような音楽・舞踊教室の隆盛の背景には、子供たちが音楽や舞踊を学ぶことを通して、楽しみながらインド文化における礼儀作法や、ヒンドゥー教の教えを学ぶ機会を作りたいという親世代の強い希望があることが、関係者へのインタビューなどから明らかになった。

### ③デビュー公演（アランゲートラム）

イギリスにおけるインド音楽・舞踊に対する学習熱を示す社会現象としてアランゲートラムとよばれる一種のデビュー公演の流行があげられる。南インドの古典舞踊は、ヒンドゥー寺院における奉納舞踊にその起源がある。デーヴァダーシと呼ばれる踊り手たちは象徴的に神と結婚し寺院で舞踊を奉納する一方、世俗（人間）のパトロンと継続的な（性的）関係をもつ。彼らの間にできた子供は、女性はデーヴァダーシに、男性は舞踊の伴奏音楽の演奏家になることが多かった。アランゲートラムは一種の顔見世公演で、デーヴァダーシが踊り手としてだけでなく、女性として一人前になったことを内外に示すイベントであったため、パトロンの候補者を招く習慣があった。

しかし、デーヴァダーシの中には売春行為を行う者が存在したことも手伝って、ヴィクトリア朝の性的モラルをもつイギリスの行政官や、インド人社会活動家たちが19世紀末から寺院舞踊奉納制度の廃絶運動を展開した。タミル地域でこの制度が禁じられるのは1947年であるが、その時点までにはほぼ完全に消滅したといわれる。デーヴァダーシの踊りは、その後バラタナーティヤム（「インドの踊り」という新名称とともに「再生」するが、その過程で舞踊家のカースト帰属、舞踊の演目、宗教的位置づけ、上演の場などが大きく変化した。この時期に、ステイグマ化された寺院舞踊は、ミドルクラスの「良家の」子女が安心して学ぶことのできる「古典舞踊」に変身を遂げ、アランゲートラムは、花嫁修業が終了したことを内外に示すイベントともなった。

イギリスでは、このアランゲートラムがさらに大きく様変わりしている。ここでは2009年に調査した事例（調査時15歳のタミル人の少女A）をもとに変化の内容を紹介する。Aはスリランカ出身の医師である父親のすすめで、タミル学校で6歳から舞踊を始めた、その後インド出身の舞踊家（ロンドン在住）に師事して研鑽を続けた。デビュー公演で配布された全頁カラーの立派なプログラムには、両親による挨拶文、演目の説明とともに、Aが通う学校、両親が関係するスリランカの政治・文化団体、インドの著名演奏家からの祝辞などが収録され、スリランカ、イギリス両国とのつながりが強調されている。公演中には、主賓・特別ゲスト（社会的地位の高いインド系コミュニティの顔役ら）がスピーチを行うことが慣例化している。莫大な費用がかかるデビュー公演は、結婚式と同様、両親の財力・社会的地位を示すイベントの一つであるが、それに加えて文化の継承がコミュニティ全体の関心事であることが共有される場でもある。

デビュー公演を行うためには公演当日だけでなくリハーサルにも伴奏者の参加が必要であるため、音楽家にとって大きな収入源となる。音楽の演奏会よりも、デビュー公演における伴奏者の需要が、インドの演奏家のロンドン移住や、イギリスで音楽を学んだ演奏家のプロ化、半プロ化の土壌を作っている点が重要である。

### (4) 演奏内容の変化

グローバル化を背景とした人と音楽の環流は、南インド古典音楽の実践の形態を少しずつ変化させている。インド在住の演奏家にとって、NRIやスリランカ出身のタミル人との接触は、海外公演や海外に弟子をもつ契機となる可能性があるため、公演の演目に彼らの嗜好を反映させる傾向がみられる。たとえば、南インド古典音楽にはテルグ語やサンスクリット語の楽曲が多いが、スリランカのタミル人音楽愛好家はタミル語楽曲を好むので、公演における選曲を調節する（タミル語の曲を増やす）ことがある。この傾向は、保守的なインド出身の音楽愛好家たちが少ないイギリスにおける公演で特に顕著である。また、スリランカ出身のタミル人が好むと言われる、映画などに挿入された親しみやすい楽曲を、演奏家が選ぶ傾向も見られる。同様に、観客が長い即興演奏に大きな興味を示さない、公演時間がインドにおける公演よりも短く設定されているなどの理由から、長時間かけてゆっくりと演奏することに適するラーガ（旋法）を演奏する頻度はインドにおける公演よりもかなり低い。

同じような傾向はインド国内でも現れ始めている。NRIやスリランカ出身のタミル人の中から、南インド古典音楽を習うものが増えるにつれ、その中心地とみなされているチェンナイ市の音楽祭に観客として参加するものが年々増加していることが、その理由であると考えられる。

### (5) インド音楽界への影響

欧米で南インド古典音楽を学んでいる若者たちにとって、チェンナイで公演をすることは本場の観客に認められる絶好の機会であるだけでなく、欧米における彼らの演奏家としてのステータスを高める手段でもある。公演を希望するNRI演奏家の増加に対応するように、1990年代半ばには、かれらを主対象とした音楽祭（その名も「NRI音楽祭」）を12月の音楽シーズンに企画する音楽団体まで現れた。主宰者側には、「海外の同胞に演奏の機会を与える」という公の見解がある一方、裕福なNRIから多額の寄付や謝礼が見込めること、NRIを顧客に想定しているインド企業の資金援助が受けやすいことなど実利的な期待感があることは否定できない。NRI

たちが演奏の機会を「買う」行為は音楽の質の低下につながるという批判は根強いが、彼らの存在はチェンナイの音楽界でも一定の地位を築きつつある。また逆に、このようなイメージが広がったため、国外に住むベテラン演奏家がチェンナイの音楽祭への参加を避けるといった状況も生まれている。

欧米での需要が高まるにつれ、演奏家たちの移動が頻繁になり、演奏ツアーだけではなく国外に移住する演奏家も増える傾向にある。全体からすると未だ少数であるが、インド国内外の両方に居を構え、往復しながら活動を続ける音楽家の数も増えつつある。

このような古典音楽世界の拡張は、音楽家たちの活動の範囲を広げ、異文化を直接に体験する機会を増大させている。かれらの海外での経験に基づく意識の変化は、古典音楽界を支えてきた社会組織（ソロイストと伴奏者の序列など）にも変革を迫っている。

## (6) まとめ

本研究では、「環流」をキーワードとして、グローバル化と南インド古典音楽の関係について検討した。「環流」概念は、インドの文化を分析するにはインド国内の状況だけを調査対象とするのは不十分であることを明確に表明している点が重要である。また、音楽はグローバルな人的・経済的ネットワークに不可分に組み込まれており、人や音楽は二地域間を一方的に「移動」するのではなく、複数の地域間を往来するという視点が重視される。

さらに、「環流」の概念は、場所と真正性（オーセンティシティ）を結びつける思考法を再検討するためにも有効である。音楽は一定の場所（国・地域）で発展し、その場所との結びつきにおいて「伝統」という価値が付与され、その歴史的深度とともに権威化（真正化）されてきた。「インドにおけるインド音楽は最も真正である」という言説はインド内外に確かに存在するが、それが暗黙の前提に移行する危険性を、自戒を込めて確認したい。

本研究の対象は南インド古典音楽という特定の事例であるが、複数の拠点をもつ音楽は他にも多数存在する。たとえば、アメリカ合衆国の民族音楽学者ジェイン・シュガーマンは、アルバニア音楽の研究の中で、「ホームランドとディアスポラは、音楽活動に関して複数の生産と消費の場所を持つ単一の領域もしくはネットワークを形成する。」と述べ、複数の場所において移動する人と音楽が交錯する様態をドキュメントすることの必要性を論じている。今後は、複数の地域に居住する人々が切り結ぶグローバルなウェブ（網の目）の上を、人や音楽が環流する様態を、他の事例と比較しながら考察していき

い。

## 5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計5件)

Terada, Yoshitaka, A musician as catalyst for change: T. N. Rajarattinam Pillai and nagasvaram music, *Indian Folklife*, 査読無、36: 8-12、2010

寺田吉孝、「世界最大」の音楽シーズン、『月刊みんぱく』、査読無、34 (12) : 20-21、2010

寺田吉孝、南インド音楽におけるリズムの身体、山田陽一編『音楽する身体—わたし>へと広がる響き』、査読無、2008、pp. 227-247

Terada, Yoshitaka, Temple music traditions in Hindu South India: Periya Melam and its performance practice, *Asian Music*, 査読有、39(2): 108-151、2008

Terada, Yoshitaka, Globalization and South Indian music, *MINPAKU Anthropology Newsletter*, 査読無、26: 8-10、2008

[学会発表] (計1件)

寺田吉孝、グローバリゼーションと音楽—移動から環流へ、東洋音楽学会（公開講演）、2009年10月17日、沖縄県立芸術大学

[その他]

ホームページ等

<http://www.minpaku.ac.jp/staff/terada/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

寺田 吉孝 (TERADA YOSHITAKA)

国立民族学博物館・民族文化研究部・教授  
研究者番号：00290924

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし